

オクタビオ・パス

—長詩『石と花の合間に』新旧二版に関する一考察—

阿波弓夫

第1章 序文

オクタビオ・パス全集（全15巻）には、『石と花の合間に』（以下、EPFと略す）と題する二つの詩篇が存在する。一篇は、1976年作として全集第11巻〈詩作品(I)〉（1935-1970）（以下、T. 11と略す）に、あと一篇は1940年作（1937年とされる場合もある）としてT. 13、「雑録(1)」（初期作品）に各々収録される。「全集」で初めてこの事実に気付いた者には、驚きと奇異さを禁じ得ないものがある。しかし、T. 11の序文に、1949年の初期詩作品『言葉の下の自由』（以下、LBPと略す）以来の増補改訂の過程についての趣意を語るパスの配慮により、その幾何かは払拭される。その際、パスは以下の如く語る。「自分に忠実であろうとして我々は変わる。もし変化がなくば、連続性も無いだろう。おそらく、私というのは幻想である。（今の—筆者）私はいづれ先程そうであった私ではない。しかも、それを知るや否やかつての自分という、その見知らぬ者に私は釘付けにされる」（T. 11, P. 17）ここには詩人パスの人間観が言葉を代えて語られている。カントやハイデッガーの超越論的自我と響き合うし、芭蕉のことを想起せざるを得ない。彼も刻々と変化する自己の詩境、つまり自己そのものを一瞬に於いて詩化すべく、改作した。スペイン語Cambiamos（動詞cambiarの直説法現在一人称複数）には、「我々詩人」という特定の主体も含むほか、「変える」と「変わる」の自他両方向の意味を可能性として持つのである。

『全集』出版（1993年）以前から、このパス青年期の代表作に着眼した者には、EPF新旧二版の併存はむしろ自然に受け留められていたように思う。そこには「時間」という要素が影響していると考えられるが、それなりに分け隔てなく受け入れられたのである。しかし、「破棄すべきだったかも知れないが、私の気持より主題への忠誠心から残こす」という苦渋の決断を予測させる「序言」付きで収録されると、いささか当惑するのである。そこには、詩学こそが民族の精神（エスプリ）を統合するものである、という信念が滲み出ている。しかしながら、中味の異なる新

旧同名の詩篇に『全集』を介し出会うとき、問題意識は一層強まったと言える。1960年に完成したLBPを1968年に大改訂するとき、パスは40篇以上を削除しているが、これを考えると、同詩篇は実に稀有なケースである。事態をより単純化して考えてみると、1937年から、1940年にかけて書かれた作品が何故40年も後になって全く異なるものに書き直されたのか、また、どうして題名だけは同一とされたのか、である。ここで非常に明確に言えることは、EPFには時の経過とともに変化するものと変化しないものが存在したという捉え方である。パスは両者に忠実であろうとして初期の作を捨てなかった。そのことの意味は奥深いものがある。我々にとっては、この両者を念頭に置くことで作品の理解はより深まる。「私の存在に係わる状況とその外面的刺激に対応して」(“ante las circunstancias de mi existencia y sus estímulos exteriores”) 創作がなされたということだが、「部分的」ながら明らかにすることはできる。これが本稿の目的とするところである。

第2章 孤独＝他者性の詩学

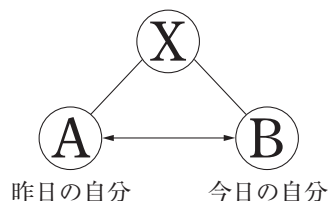
詩とは言葉化された真の自分である。時々刻々、自分は変化する。詩とは一瞬たりとも同じでない自分を反映している。それは絶えず生命力 (la vivacidad) に満ちたもの、或いは活力を喚起するものである。次の回転を内に孕んだ記号。自分に乗り越えられた言葉は詩ではない。その意味で詩とは常に未知なるものを含むプラスアルファである。

詩篇を一つ想定してみよう。それは今の自分を言葉化したものである。その詩篇は次の「瞬間」(それは、翌日でも、一年後でも、十年後でもいいが)には「昨日」の自分を表現したものとなる。昨日の自分の内から今日の自分が生じる。「今ここ」に生きる自分こそが「真の生」にある自分であるからだ。そのように最初の自分が次々に「今の自分」へと連なっていく。その都度の自分を認識しえているのは実は、もう一人の、不変の存在としての「自分」がいるからに他ならない。つまり、「昨日の自分」でも、「今日の自分」でもない、もう一人の「自分」のいることを認めるしかない。でなければ、ただ「自分」だけしかいないことになる。これはモノローグの「世界」である。この自分を越えて外から自分を見る意識——つまり、自意識——こそが近代の精神(批判と反批判の意識)と言える。その「私」は「幻想」である。“el yo es ilusorio”) また、「亡霊」(“fantasma”)である。「仮面」(“máscara”)である。色即是空、である。ヤスパースは、生成こそ存在である、と語っている。

先の三人の自分のトリアーダ (“Triada”) を図解すると以下の如くなる。

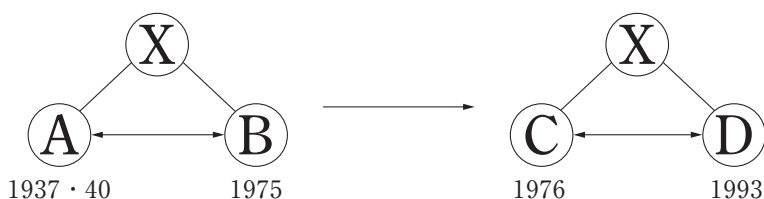
「今日の自分」(Aとする)は「昨日の自分」(Bとする)を否定している。前者を否定することで後者は生じるが、前者なしには後者はありえない。それ故、双方は補完関係にある。AとBの関係は対立

(両者を見る自分)



しつつ補完し合う。AとBの敵対と不可欠性とは、それらを越えた存在たるXによって中和、ないし昇華されるのである。ここには、パスの人間観があり、彼の詩学を成立させる基本原理がある。自己が自然の一部としてあった(例えば、月の満ち欠けで未来を予知する)古代人においては時間概念は同じサイクルの繰返し—円環運動する神話的時間—となる。「近代」の時間概念は、その批判と反批判の必然性によってスパイラル状になる。これがパスの言う詩的時間概念であり、西欧近代の(資本制、共産制を問わず)進歩史観に大きく規定する直線的な時間概念とは端的に区分される。そこには基本的に「他者」をもたない近代が見られるのである。パスは第一の「読者」として絶えず詩作品と対話、東洋的感性に出会うなかで「他者」を認識したのであろう。Bから見てのAが認識されるには、Xという他者の存在が不可欠である。「他者」の発見こそが真の「近代」の指標である。でなければ、それは単なるAかBかの二元論となる。本稿の主題となるEPFでは、原理的には重要な課題となる。「序文」(T. 11)にも語られるように、EPFは1960年以降も何度も書き換えられる機会があった。この作品は「ユカタン、1940」「メキシコ、1940」と日付、場所入りで創作されていることを考えると、ヨーロッパ(スペイン、フランス)訪問(1937—38)の後に、その体験を踏まえて書かれたことを意味している。そして1960年まで不変のまま持ち続けられ、1968年の大改訂でも「生き延びた」のである。すでに20年近い「自分」の激変にも拘らず維持されたのである。即ち、この詩篇が詩学の構想に果たした役割は決して小さくなかったということなのだ。その一つは、先のトリアーダからの当然の帰結であるが、Aという意識された「昨日の自分」には、意識されない自分、言わば集合的無意識としての普遍的な「自分」を前提としていることだ。これは人間個人で言えば、深層心理、「未知なるもの」である。また、人間集団の歴史で言えば、歴史以前の歴史である神話に相当する。同詩篇は、パスの変化する自分を常に受け留められたほか、次の自分を孕みうるポエジーを擁した。ところが、突然抜本的に改訂されるのである。「EPFは幾度となく版を重ねた。1976年、本版を準備するにあたり読み返えしたが、不備不足が多いと感じた。破棄

することも考えた。しかし、熟慮の結果、私自身の気持よりも、主題への忠誠心によって、完全に書き直す決心をした¹⁾、と述べたあと、この躊躇いに追打ちをかけるように、「破棄の方がよかったかも知れない」(Tal vez habría sido mejor destruir, un intento varias veces fallido.)と結んでいる。詩人と私人、詩学と感情、歴史と記憶の相剋とそれら反対物の合一をパス詩学の基本特徴として、最初に見据えたのは、スペインの詩人ホルヘ・R. パドロン (Octavio Paz Ediciones Jucar, 1975. p. 126, 129, 134頁)である。ここで「自分のトリアーダ」を図式化すると以下のようになる。



いずれにせよ、パスの内部、「自分」のうちに途轍もない断絶的な変化^{ルプトゥーラ} (ruptura) が生じたのだ。このrupturaとは一体何なのか。即ち、パスに於ける状況と文学、記憶と創作、これらが本稿の主題の内に当然孕まざるを得ない問いである。

第3章 EPFの成立と配置

オクタビオ・パスの、特に書誌学面の研究者であるウーゴ・J・ベラーニによると、本詩篇は、1941年にNueva Voz社から単独の詩集として上梓されている²⁾。その翌年のA la orilla del mundo (ARS出版, 1942)にも、パスの最初の詩集本とされるLBP (Tezontle版, FCE, 1949)にも収録されていない。さらに1960年の全作品集として出版されたLBPにおいても同様である。同『全詩集』はその後、大幅な削除のうえ大改定されるが、1968年のLBP第2版に於いて初めてEPFは収録される。1968年版の5つの部門の一つ、Caramidades y Milagros (「災禍と奇跡」)に配置されている³⁾。また、1968年以降もLBPは何度も版を重ねている。1977年にPlural誌時代の盟友であるフリオ・シエレールとのインタビューの中で、エクセルシオール紙編集長の質問 (「政治的または, comprometida〈行動主義的〉な作品を削除しているが、これは自分の過去を受け入れたくないことなのか⁴⁾」)に対して、「40篇以上削除したが、真に政治テーマのものは一篇だけしかない」とこれを否定している。その

削除された詩篇は、後章で触れるが、スペイン人友人ホセ・ボッシュの死を悼んで書いた *Elegía a un compañero muerto en el frente de Aragón* (「アラゴン戦線で斃れた同志への悲歌」(以下、「悲歌」と略す)を指し、これは一担削除されたが、今回、つまり1976年に「再収録した」と述べている。そして、これに続いて言及されているのが、EPFのケースである。パスは同詩篇のリメイクを次のように語っている。「それに反して、これらより一層重要な詩がある。それは社会的テーマの作品EPFである。私の詩集のほとんど全ての版に収録されているが、常にこれには不満足を感じてきたので、昨年新しく書き直した。これは1978年に *Vuelta* 誌9号に掲載された」(El ogro filantrópico. P. 322) 時期的な点を言えば、パスは長い外国生活から帰国した1971年に、シェレールが編集長を務めるエクセルシオール紙の文芸誌 *Plural* を立ち上げて5年後の1976年、同新聞社の組合紛争が原因で同編集長が辞任するにともない、パスもこれに殉じて辞職した。そこでパスは多くの寄付に支えられ「自力」で文芸誌 *Vuelta* を創刊することになるのである。後述するが、EPFの完全リメイクがこの時期、1976年に当たっていることは興味深い符合である。1989年に出版されたパス自選集 *El fuego de cada día* (S. Barral社, P. 36) では、EPF 1976年版が採用されているが、詩篇の末尾には「Mérida 1973, México 1976」と製作場所、日付が付記されている。この際には何故か先の「悲歌」は収録されていない。このEPFは、1990年の *Obra Poética* (1935-1985) (S. Barral社) に再収録され、またホセ・ボッシュの死を悼む「悲歌」は復活されている。まるで、EPFの書き直しと交換に「悲歌」が補完的に収録されるといった印象を与える。1937年という、パスにとり詩作上決して豊かでなかった時期(逆説的に、好期)に生まれたわずか二つの詩篇であるだけに、この取捨選択は青年パスの内面的変化(彷徨)を直接反映している。

同版はそのままパス全集にスライドされている。T. 11, *Obra Poética I* (1935-1970) (初版 *Círculo de lectores*, Barcelona, 1996, 第2版 *FCE*, México, 1997, P. 86) に末尾の *Mérida, 1937, México, 1976* とともに収録されている。さらに、T. 13 *Miscelánea I* (初期作品, P. 106) にEPF 1940年版が収録され、末尾には、*Yucatán 1937, México 1976* が付記されたほか、冒頭の詩篇名の下に日付(1940)が明示されている。

第4章 友人ボッシュの教訓、詩人の覚悟

閉塞した時代状況にあって友人ボッシュはそこに差し込む一条の光を意味した。彼の存在はパスにとり時間が経つほど、体験が経験に変貌するにつれてよけいに大

きく重なっていった。EPFを考える上でも必要不可欠な要素となる。

先述の通り、パスは全集に彼の詩学の原則を曲げてまで、このアナーキストで友人の「死」を悼んだ詩篇を収録している。「歴史に詩を持ち込もうとする青年パスの最も野心的な（かつ、不出来な）試みだった」（シェリダンP. 227）とは言え、詩が根も葉もない所から突然湧くものではなく、現実の内側から紡ぎ出されるものであるかぎり、ボッシュの影響は俄には推測し難いほど深かった。

後述するが、1976年版と比べ40年版の特徴は、「エネケンの栽培と国際価格の浮沈に翻弄されるマヤの農民たちの貧困に衝撃を受けた」（*Obra Poética*, 1990, P. 785）と語っているが、そこで彼が資本主義を全否定するとき、その強さを彼に与えたものは、ボッシュをおいて他にない。パスは彼から二つの面で影響を受けた。一つは、実際行動の面、である。あと一つは、アナーキズムの学習の面である。自由か平等かの対立は、パスによればフランス革命以来繰返された歴史である。しかし、パスはボッシュの影響の下、自由を平等（つまり、正義）の要と捉える。あくまで自由を第一義とする考えを強めた。即ち、焦眉の急に際しては、芸術に政治的主張のそれも、芸術のための芸術もないのだ、ということ。問題はむしろ、そうした立場を永久化することにある、という理念と感情の矛盾を越える道を教えたことである。パスの詩篇「悲歌」に対するジグザグな対応はその辺の葛藤をよく表わしている。アンドレ・ジイドの『ソビエト旅行記』出版（1936年11月）が欧米—日本などで巻き起こした「激論」の震源地パリを1937年来に訪れたことを勘案すると、パスの心中は容易に想像し難い。ボッシュの影響は特定の時代状況の下に生じた一過性のもものではなかったのだ。パスの精神に根を下ろし、形を変えてその行動を左右した。「彼の影響は持続的なものだ。そこから、私が今でも目上の者や、官僚や権威主義的イデオロギーに対し抱く嫌悪感が始った」（*Obra Poética*, P. 788, T. 11 P. 527）と述べている。

1929年にボッシュを知ってから、パスは二度彼と学生扇動の罪で留置所に拘束されている。2度目は1930年に国立高等学校ENP(サン・イルデフォンソ)に入学してからである。この際ボッシュの不法滞在外国人であることが発覚、公安当局によりそのままスペイン本国に送還されてしまう。それから5年後の1936年にスペインで市民戦争が勃発すると、ボッシュの参戦を誰もが想像していたが、ある時、誰かがアラゴン戦線で戦死した共和国派兵士の名簿を入手し、その中にボッシュの名前を発見する。その時の彼らの心境をパスは次のように語る。「訃報に接して、我々の士気は高まった。彼の伝説が生まれた。我々はやっと一人の英雄と殉教者を持つ

た。1937年、私は一篇の詩を書いた。それが〈アラゴン戦線に斃れたホセ・ボッシュに捧ぐ〉である」(Obra Poética. P.790-791.)そして、パスは「家族も学校も住み慣れた町も捨てて」東部最果ての地ユカタンに中学校教員として奉職する決心をしていた。この点に関しては前回の論稿「オクタビオ・パス、詩作の瞬間、創作の源泉」(『論叢』第35号、2008、158、162頁)で詳述したので割愛するが、この詩はパスがメリダ市に入る1ヶ月前(1937年2月21日)同市Diario de Sureste紙に掲載されていたことから分かるように、革命の急先鋒として当地に赴く様子が推測できる。そこには、社会主義は政治・経済問題でなく、殊に人道問題であり、またファシズムとの闘いは人道主義(humanismo)であるとの信念があった。「まさに、ユカタンはこれらの若者たちにとり、ボッシュの〈アラゴン戦線〉のメキシコ版を意味した。ユカタンの少数支配家族とその封建体制はフランコと彼らファシストだった」(シェリダン、P.217)若者たちのユカタン「遠征」にはボッシュの影が強く出ていた。

メリダで5ヶ月ほど経った頃、突然メキシコ市からパスの元に大至急帰朝せよの電報が届いた。スペイン、バレンシアで開催される第2回反ファシズム国際作家会議に招待されたからだ。スペイン滞在中、バルセロナで行われた在住メキシコ人協会主催の朗読会で、パスは意外にも客席に座る「斃れた」はずの友人ホセ・ボッシュを「発見」したのだ。パスは動転しつつも、読むはずの彼の死を悼む「悲歌」の題名を「un compañero muerto」(「斃れた同士」)に差し換えた、という。

ボッシュは「軍事情報機関」(SIM)に追跡され、隠れ家を転々としていた。「刺客の手で」毒殺される、と「譫言」(delirio)を口走るだけで、パスとは会話にならない精神状態にあった。彼の学生時代、沈着冷静で正義感に燃えるボッシュを知っているパスには別人であった。翌日連絡すると言いつつ残して闇夜に消えていく彼を見たのが最後になった、という。J.シェレールとのインタビュー(1977年12月)に於いて、「ボッシュはフランコ独裁とスターリン主義の犠牲者」(El ogro filantrópico 1979, P.326)とだけ語っているが、「悲歌」成立の「秘話」を明らかにするまで約10年を要している。パスがその政治思想の根本にdisidencia(政治的少数者)問題を置く背景には友人ボッシュとの具体的体験の思想化(経験化)がある。いずれにせよ、パスの用いる言葉の一つ一つについて、その裏側を推察する詩的想像力の求められるところである。

生ける屍同然と化したボッシュを目の当たりにして、パスは政治か文学かの二者択一の「陥穽」を見たのだ。政治は「敵の敵は味方」の論理でdisidenciaを圧殺す

るからだ。それは巨大な回転機械に巻き込まれるユカタンの農民たちの奴隷同然の姿に重なる。前者は共産主義の、後者は資本主義の「生け贄」である。しかし、ボッシュを「生け贄」と捉えればスペイン非難を意味する。そうすれば、そこに参加した自分の気持ちに反することになる⁵⁾。「悲歌」を再収録したパスに苦渋の決断のさまが想像できる。そうした背景を念頭に置くとき、EPFとの影響関係はむしろごく自然のことと言える。現代の「生け贄」ボッシュがそのまま球戯場のマヤ人戦士-競技者のそれに重なる⁶⁾。ユカタンのマヤ遺跡、チチェン・イツアでの幻覚体験そのもの。40年後にして初めて感覚的なものとして表出した記憶である。「悲歌」を再録することで、政治性の強いEPFの第5連（資本制の全否定）を削除し、重複を避ける、そのような配慮が働いたと考えても大きく外したとは思えない。1969年版LBPに復活収録を決めたパスは、「誠実で、人民的スペインへの私の信念とホセ・ボッシュへの友情の二重の証し」としてその理由を明らかにしている。（*Obra Poética*, P. 786）また、同じ1937年作のEPFについても、「何度も削除を考えたが、私自身の気持ちよりも、主題に対する忠誠心から捨てずに書き換えた」の明記している。それぞれの事情から、自身の美意識の基準に例外事項を設けた、と結論付けるのは易しい。ここでもパスの *disidencia* に対する考え方が形を変えて実際行動の面で表現されるのである。機械的に詩論を構築していくことの内に冷徹さを見るパス。パスのヒューマニズムと詩学とのぎりぎりのせめぎ合いを、スペイン市民戦争下のボッシュ、メキシコ革命「直前」のマヤ・エネケン農民という異なる主題のうちに読み取ることの方がより有意義ではある。

第5章 「石と花の合間に」を読む

EPFの二つの版について寓話的にそこに流れる詩情を表現すると、以下の通りである。

山間僻地に住むという親戚がいて、子供の頃から聞いてはいたが、現地を見たものはいないし、生活様式も顔立ちも違うらしいことぐらいしか知らない。何か出来ることはないかと思いついて無理を承知で訪れた。そこは自分の住む所とは異質な世界で、容易に説明しえないところであった。初めて見るエネケンの激しい立ち姿と生命力には驚くが、その下で人間が焦熱地獄にあえぎ、かつまた夜には漆黒の闇に包まれ明日もまた陽が無事に上るかと思おのきつつ死の眠りについてた。エネケンという国際商品を栽培する農家でマヤの人々は奴隷同然に働き、彼らの文

盲につけこむメスチーン系農園主に負債を背負わされているその状況は、太陽と水を糧に20年の生命を刈り取られるエネケンのそれと重なった。彼らは世界経済の永久的歯車と化し、自らの死を死ぬために生きる苦しみの行為としての労働。その潤滑油は^{カネ}銭である。^{カネ}銭のおかげで自信も誇りも捨てたまま、古来の慣習を反復する。不幸と墮落の元凶はエル・ディ・ネ・ロ（お・カ・ネ）である。^{オカネ}銭、オカネがすべての世界を焼き尽くせ。全てを焼き尽くせ。以上であるが、若き詩人がユカタン社会の不条理に抱く激しい憤怒を率直に表現している。用いられる詩語は日常語に近い。そこでは搾取も貧困も暴力的で剥き出しである。真昼の灼熱のエネケン畑と同様である。パスにとり許せないのは、マヤの農民たちが搾取に無自覚であり、宿命的にそれに付き従っている、という事実である。見渡す限りの大地、深く蒼い空、天に向い炎の手を押ばすエネケン、刺、花、そうしたミクロとマクロ世界の照応として展開される。シェリダンによると、1937年3月、メリダ市に着くやすぐに詩作を開始している。(P. 227) 結局4ヶ月で終わることになったが、詩作は彼が異文化の現実と直接向き合うなかで行なわれたということだ。しかし、その完成はヨーロッパ訪問から帰って2年後の1940年である。パスらの行動は政府の対ユカタン農政に影響を与えた。当時、ラサロ・カルデナス大統領は1938年に直接現地に赴き土地分配の陣頭指揮を振ったのである。しかし、それから約30年後、1976年の大改訂版の注釈の中で現在を記録している。「農地分配にも拘らず、彼らの生活は改善していない。役所と組合の官僚主義の犠牲者であり、国際市場に左右されている。農民が資本主義経済の非人格的構造に束縛される関係を示したかった。(以下略)」と語っている。(Obra Poética, P. 786) また、シェレールとの対談の中では、「EPFは当時と、そして今の私の気持を表現している」と述べた。

EPFの研究状況について若干検討しておく、最初期のパス研究者、ラモン・シラウ、最近、括目すべきパス論(“Poeta con Paisaje” Ed. Era, 2004)を上梓したUNAMのG.シェリダンに関して言えることは、両者とも1940年版のみ検討していて、1976年版への言及はない。特に貴重なのは、M.ウラシア(“Arbol Milenario”, 1999 P. 51-57)は1940、1976年の二つの版について若干比較を行っている。これは本稿には有意義な先行研究として期待するところだが、言及されているのは1940年版に集中している。彼は40年版と76年版を二点に絞って比較し、そこからこの大改変の意味を検討している。一つは、エネケン観の違い、である。ところで、パスは当初本詩篇の題名をEl henequén(エネケン)としていたことは既に述べた。この大方のメキシコ人には知られていないが、戦前の一時期世界市場で爆発的な需要増を

みた作物の名前を特別に押し出すところはよく分かる。この点も含めて、ウラシアの指摘は貴重である。

凍った号泣の光の下で
不動の憤怒, エネケンが
その緑なす人差し指もて
われをかき立て焼き尽くす
無言の怒り, かたち見ゆ⁷⁾

(仮訳, 筆者)

1940年版では、エネケンの自然のコンテキストの中で苦しみを生むエレメントと見なされる。(ウラシア, P.54) これに対し、1976年版では、以下の通りである。

緑して泰然自若, エネケンは
幅広の肉厚三角の葉が芽吹き
植物の三日月刀の供給者
エネケン, 武装する植物⁸⁾

(仮訳, 筆者)

著者ウラシアは、二つの版の違いを「表現主義から純粹主義への転換」と表現している。一読するだけでその間の相違は明白である。前者は「号泣」「怒」「かき立て」「焼き尽くす」「無言」など激しい情念の噴出をそのまま詩語化している。エネケンという自然が人間の喜怒哀楽のタームで人間的なフォルムを与えられている。パスが当初「エネケン」という題名を与えたことが納得できる。後者については、「泰然自若」「三角」「三日月刀」「武装」「植物」など、形象性、抽象性が強くなっている。エネケンとの共振としての生々しい感情表現はここでは脱落しているが、エネケンの支える感覚的なカテゴリーに関しては、人間的な表現から、言葉そのもの (triangular, alfanjes, armada) に立脚した表現法に転換しているとも言える。そこには、1937年当時、エネケンは未知の植物であり、1976年になると、その神秘性は薄らいでくるといふ自然と人間の遠近関係を考慮してのことであろうことは容易に推測できる。しかし、二つの版に共通して言えることは、「苦悩の元凶」としてであれ、「抵抗の象徴」(天を突き上げる三日月刀としてのエネケン) であれ、エネ

ケンに自分を重ねるという関係性には変わりはないのである。

第6章 「石と花の合間に」を読む（Ⅱ）

ウラシアはもう一点、冒頭部分に関して二つの版を比較している。

(1940年版冒頭)

毒入りの夜の静寂^{しじま}に
へびの朝が目を覚ます

石の朝が目を覚ます
地をはう根
瘦身の乾き，結晶化した硬質の唇

朝の光は鋼の如く
侮蔑に干涸びた唇
触れた我が身傷付いて
エネケンの刺，憎悪して⁹⁾

(T. 13. P. 106)

(1976年版)

石の朝が目を覚ます

光だけ。何もない。ただ光
反射する光があるのみ。

大地：
石の手のひら¹⁰⁾

(XI, P. 86)

(仮訳，筆者)

ウラシアはこの二版の違いを先述のケースと同様に「40年後の詩型から距離をとった」と述べるとともに、「メキシコの世界詩の伝統の中で最も美しい詩の一つ」

と評している。社会的モチーフの詩篇としての基本的性格は変わらないという形で、二版の共通性を強調して結んでいる。ウラシア評と多少重複するかも知れないが、本詩篇の性格を確認する意味で私見を述べる。言うまでもなく、この冒頭第1連は第5連とある意味で反復の関係にある。とすれば、76年版で削除された、この第5連を間接的に説明している点見逃せない。さて、40年版冒頭部分は衝撃的な始まりを印象付けている。しかもそれは、ゆっくりと、ジワジワと浸透していくような質感が特徴的である。この点に関して研究者の誰一人としてパスの評論文「微笑みと贖罪¹¹⁾」の冒頭を想起していないのは不可解である。本論稿については『論叢』第35号で検討したのでここでは割愛するが、同文が書かれた背景について考える際の参考として、以下の事実について押えておきたい。本論稿はおそらく同年8月、つまり1962年にメキシコ市で開催された第35回国際アメリカニスト会議¹²⁾に因んで書かれたものであろう。同会議の中心課題と同様に、メソアメリカ文明の起源をめぐる論争(生け贄の儀式など)に一石を投じた。これに関しては本稿の直接主題とするところではないので割愛するが、EPFとの類似点は極めて興味深いものがある。夜明けの光が最初はゆっくりと弱々しいものであるが、次第に強くしっかりと部屋に差し込んでくる様子をパスの見事な筆致で再現されている。その光の様子は、既述の如くまるでヘビが獲物を狙うようなゆっくりと、だが確実な動きとして描写されている。それはヘビに重ねつつ、再生の朝の生命力を同時に表現するものだ。蛇・Serpienteとは水。豊穰、雨、生命力、再生力、川の流れ、等々、自然のメタモルフォーズである。毒であり、悪である。二元性の象徴。メキシコの神話、最大の創世神話の主・ケツアルコヨトル(羽毛ある蛇)の象徴である。

また、EPFという題名に興味を抱く者も少ない。非スペイン語圏の者からすると、これは理解しかねる。エ・ン・ト・レ・ラ・ピ・エ・ド・ラ・イ・ラ・フ・ロ・ルと読むが、早口ではどうしても流し読みできない語呂並びとなっている。パスの作品が総じて滑らかなのに比べて、この詩篇の不適切極まりない「配慮」は特別な意味を帯びる。「石」や「花」の象徴性は言うまでもない。シェリタンは、EPFが最初El henequén(「エネケン」)という題名だったことを紹介している。これは同年、ユカタンを旅した友人で詩人のE.ウエルタがその旅日記Diarioの題名にEntre la piedra y el cielo(「石と空の合間に」)としていたところから着想したと述べている。パスは「空」ではなく「花」と命名しているが、それは祖父イレネオ・パスのインディヘニスタ小説・「ドニャ・マリーナあるいは生け贄の石¹³⁾」から着想したのではないか。いずれにせよ、本詩篇は象徴性、宗教性抜きには理解できないのである。そ

うした性格を凝縮させているのはやはり第1連、第5連である。第1連は既に検討したように蛇の動きさながらゆっくりしたテンポで始まる。そこには恢復の緩慢なさまが写し取られている。前年パスは父親を鉄道事故で失っている。親友ホセ・ボッシュの「死」も知らされた。彼の喪失感は尋常ではなかっただろう。パスが再び詩に向かい始めたこと自体、彼のゆるやかな恢復を物語る。それほど彼がユカタンの異文明から受けた衝撃が深いものだったということを逆に証明している。「石」「毒」「乾き」「鉋物」「侮蔑」「鋼鉄」「傷」「刺」「熱」「喘ぎ」「号泣」「凍」「激怒」「死」「剣」「復讐」、第1連全体がこうした言葉の列挙となっている。毒を含んだ重々しい朝、しかし蘇生した朝という対極的なイメージが美しいコントラストを奏でる。これが同時にエネケンの朝である。パスの心境がそのまま投影されている。76年版と比べると、違いは明白だ。「石」「光」「大地」「水」「島」「水瓶」「地平線」「雲」「平原」「空間」「空」。ここには怨念、執念、憤怒といった毒のある表現は消えている。むしろ前方に開かれていく晴々とした心境が感じられる。追加的に40年版第1連の末尾のフレーズを比較検討してみよう。

(1940年版) 午後6時

大地に昇る白い蒸気
鳥の黙して飛ぶ、羽毛の泥土
無慈悲な恒久の空に雲の湧き立つ¹⁴⁾

(1976年版)

大地に昇る蒸気
褐色の鳥の飛び立つ羽毛の泥土
地平線：
ここかしこ雲のたなびき¹⁵⁾

(仮訳、筆者)

前者は内に抱え込んだ激情が夕暮れ時のねぐらに帰る一瞬に滲み出る。それに反して後者では、視界がすっきり開け、爽快感に満ちている。「雲」の表現についても、前者は急に雲が湧き青空を埋める、といった調子である。cruel、つまり「残酷な」「苛酷な」あるいは「ひどい」といったネガティブなイメージの言葉が用いられることで、洋々たる前途に深い憂慮のイメージが込められている。マヤ

人の宗教観に関して言えば、夜は太陽と星辰の戦いのとき。再生の太陽を祈念して人は生け贄に供された。そのような苛酷な現実を宿命として受け入れるマヤ人たちは今なおその宗教イデオロギーにより、国際市場の浮沈に翻弄される事態を宿命とみなす。そこでの歯車の不条理を断ち切るには理屈は通用しないのだ。全てを焼き尽くせ。パスは第5連に於いて、その究極の激怒を*arde*という言葉の反復使用することで効果を上げている。

第7章 第5連とラモン・シラウ説

スペイン人哲学者ラモン・シラウは、M.ウラシア、G.シェリダンらとともにEPFを分析する数少ないパス研究者の一人である。ウラシアは唯一、40年版、76年版を比較し、社会詩EPFを共通項として取り出す。R.シラウの場合、その著書『言葉の意味』(El sentido de las palabras) (Joaquín Mortiz, 1970.) の出版年から言って1940年版しか検討の対象とはなりえないという点で興味深い例なので一瞥しておく。同書の第1章「孤独の弁証法」の中の「孤独の体験」(“la vivencia de la soledad”)の項でEPFに言及している。シラウによるとEPFは次のような詩篇に属する。「見知らぬ者」(El desconocido)〈誰も継がない、誰も共に歩まない〉、「囚人」(Prisionero)〈お前の硬玉の城の中で、お前の像は引き倒され、そして修復される。飽くこともなく〉「エゴイスト」(El egoista)〈世界よ、私は欲しない。私が住む身体すら、自分のものと認めない〉、「ホテルの部屋」(El Cuarto de hotel)〈外では夜が深まる。人間のむなしい戦いに目もくれず〉。そして、シラウの見解は次のようだ。「私、el yo(「個我」「我」)の遠のきと閉じこもり、el cerrazón(即ち「孤独」一筆者)は、体験(としての孤独一筆者)より経験(としての孤独一筆者)である、と述べている。(“la distancia y la cerrazón del yo es más conciencia que vivencia.”)EPFも含め、先述の詩篇は全て1938年から1942年までの「青年期パスの作品」(P. 30)であり、シラウはこれらの作品を「絶望によって倍化された孤独者(あるいは、単独者el solitario)の詩」と特徴付ける。そして、(この時期の一筆者)「パスはスペイン語圏で最も絶望の経験をもつ詩人の一人となった」(P. 30)と語る。その究極のケースとしてヨーロッパから帰って直後の1940年作EPFであることは言うまでもない。そして、そのパスについて、「彼は孤独と絶望をどのように乗り越えるか」と問う。それに答えてシラウは、「キルケゴールと同様、まさに絶望を一層深めることによって」しかも、「暴力、激情、激怒の道を辿ることで絶望の海溝に沈む」という。そ

の根拠を象徴するものとして第5連冒頭の6詩句を挙げている。

与えよ我に、不可視の炎、冷たき剣なる
お前の執拗なる激高を
全てを終わらせるために、
ああ、乾いた世界よ
ああ、流血の世界よ
全てを終らせるために¹⁶⁾

(仮訳、筆者)

そして、これらの詩句を根拠にパスのこの時期の作品について、次の二点を定義する。まず、その一点は以下の通りである。ゴロスティサやビジャウルティアなど先行する詩人たちにとり「宿命的に孤独に屈服させられているため暴力に訴えることはない」が、パスは「抗議し、孤独から自分の置かれている孤独を罵る」(P. 31)として彼のうちに「反逆的、革命的気質」を見出す。彼の「好戦的」気性がエネケンの形状からくるイメージと重複するのである。先の冒頭詩句にある「不可視の炎」「冷たき剣」はいずれも天に向って槍の如く突き上げる、また舞い上がるエネケンのメタファであることは明白だ。絶望に沈むのでなくそれにむき出しの怒りをもって挑む精神を読み取っている。次に、暴力と革命が詩型に反映している点である。〈「反復」(la reiteración)は革命や暴力を表現するのに用いられる常套手段である〉(Violencia y revolución se reflejan en el estilo. Su signo suele ser el de reiteración.)と語っている。同書では他の詩篇の例で示しているが、EPFのこの部分についてみれば「para acabar con todo」の反復であることは明白だ。すでに触れたが、ウラシアの場合、反復は革命(revolución)の記号化ではなく、機械的な動き、回転を意味するla ruedaに対応している。いずれにせよ、反復は暴力や革命家、現代の産業システムとして捉えられるか、いずれかである。

第8章 第4連、エネケン・貨幣^{オカネ}・歯車

第1連では、ユカタンの夜明けに絶望した気分が重ねられた。暗く重く冷たい号泣、激怒、激情の言葉として連鎖していた。第4連を40年版と76年版で比較すると、ほぼ同様のイメージが立ち昇る。76年版では第4連が最終連であるが、40年版のモ

チーフを凝縮した形となっている。と同時に、先取りの言え、76年版では第5連は消滅するが、その第4連に一本化されるといった技巧は見られない。むしろ、40年版をより強調する形で76年版最終連は特徴付けられる。

先ず、40年版から見ると、「貨幣は人生の歯車、…日ごとお前を腐らせる」「大地と夢の天使。知られざる遠き水、ああ、見放された者よ、ああ無垢なる者」マヤの人々とエネケンに踊る国際市場の不条理がリアリズムで描写される。それらはアフオリズムに匹敵する。「貨幣は魔術師」「貨幣は水と埃」「空気を消費する火」「美しい貨幣は忘却させる」「音楽の扉を開き、欲望の扉を閉じる」「死は死ではなくて影、貨幣の見ぬ夢」等々。76年版の第4連最終連ではエル・ディ・ネ・ロ（貨幣）の反復が絶頂に達する。全体56詩句からなる、この最終連の内、26回エル・ディ・ネ・ロが占める。詩語としての意味にもまして歯車の回転を連想させる。パスはヨーロッパから帰ってメキシコ中央銀行で使い古された紙幣を毎日焼却する仕事をしてきた。また、この連の冒頭に「貨幣とその車（輪）」というフレーズが効果を發揮している。個別に小さな渦のように構成された詩句もある。「惑星は貨幣になる」「貨幣は数字になる」「数字は時を食う」「時は人を食う」「貨幣は時を食う」と、全体が回っている。同様に、「ピラミッドは貨幣を拒む」「偶像は貨幣を拒む」「呪術師は貨幣を拒む」と、それぞれ回転して小さな渦を形成している。そして、この回転はこの連の最終フレーズに近づくと激しさを加える。「マネーは大いなる権威者」「マネーはお前を名無し（ninguneo）に変える」「マネーは罰」「マネーは血を吸う」など「マネーとは」の連続となる。ここではマヤの人々を巻き込むマネー一色の現実を、詩人の世界とは徹底的に相反するものとして鋭く対立させている。そこでは、詩人の求める世界、無垢の世界、人間が世界とまたその創造物と一体となる世界（en donde el hombre es uno con el mundo y con sus creaciones）へのノスタルジーが、マヤの人々の失なわれた世界と重なるのを見るのである。そして、パスは古来、このような譎言を持ち続けた詩人たち（ノバリス、ネルベル、ボードレー、ロートレアモンなど）の、ある者は発狂し、ある者は夭逝し、またある者は隠棲を余儀なくされるなど、不幸に襲われた先人たちの果敢なる行為を「ただ羨ましいの一言に尽きる」（「孤独の詩、感応の詩」Las peras de olmo, UNAM. 1957, P. 303）と語っている。それは、乗るか外るかの大膽さにより、「神罰（un castigo divino）が彼らに下ったからだ¹⁷⁾」と明言する。ここにパスの自己犠牲の精神を読みとれる。物言わぬマヤ人の側に立って、無垢なるがゆえに彼らをエネケンの不条理の世界に投げ入れる、^{ラ ルエダ}la ruedaの論理を告発するとき、パスのうちに先人たちと同

じ「謔言」の精神が再生されるのである。それは自らを「生け贄」として差し出すいさおし勲功なのである。

第9章 第5連、我に神罰を与えよ。

R.シラウの分析として第5連については先に若干検討を加えた。第4連に関しても、40年版、76年版ともに激しく回転するイメージが詩型上の工夫によって表現されていた。40年版の最終連である第5連では、ardeという詩語の激しい反復が一目瞭然となる。ardeは、動詞arderの二人称tú(君、お前)に対する命令法の活用形¹⁸⁾。「燃える」「燃やす」「焼く」「焼ける」等々、自・他動詞ともに用いられる。詩句の数は全体で33あるが、立ち昇るイメージは第1連でそれとほとんど変るところがない。「炎」「剣」「乾燥」「流血」「滅」「砂漠」「盲目」「崩落」「不毛」「石」「凍」「怒」「不可視」「怨嗟」「石」「骨」「天火(炉)」「死」「破壊」など怒気を含んだ重々しい詩語で埋め尽くされている。その間を、動詞arderの命令表現ardeが小刻みに挿入され、激しい反復回転を印象付けている。因みに、その語の使用回数は全33詩句中、15回となっている。この詩型の内に言外に表現されているものを推測するのはそれほど困難ではない。特に、第4連のイメージとあわせて考えると、激しく渦の如く回転しつつ舞い上がる炎のほかには想像しにくいものがある。天に向かって剣を突き上げる立ち姿のエネケンが地平線の彼方に拮がる。詩句の上では、「無言の剣」「冷たい炎」とエネケンを象徴化しているが、その裏には神罰が下って業火に焼き尽くされる自分自身をイメージの内に重ねているのである。反体制作家T.レブエルトスのキリスト教信仰を再検討するに際して、「革命家は歴史から神を追放しなければならない。革命家の最初の仕事は、天を批判することである¹⁹⁾」、と語っている。また、ここではユカタンでの「ある朝」の「幻覚体験²⁰⁾」が想起される。いずれも根底には彼が「家を捨て、学校を捨て、住み馴れた町を捨て」メリダに向ったことの内にある。即ち、自己犠牲の精神である。この心理状態こそが業火に焼かれる自分をエネケンの「冷たい炎」に投影させる。孤独の絶頂に於て、R.シラウの言う「絶望を暴力と革命に転化する」という読み方は、76年版未だ存在しない段階での一面的かつ宙吊りの見方である。同氏に於ては、la ruedaの象徴されてあるものは、暴力や革命という、おそらく『孤独の迷宮』(1950)で議論された「亀裂(ruptura)と再生」の反復的歴史観(これだけでは再生の原理が不明だが、これはメソアメリカ文明史観に通じる)に影響されての考え方であろう。しかし、パスにはそうした

近代西欧思想からの自由も意識されている。la ruedaが仏教で言う「初転法輪²¹⁾」に通じる言葉として、彼の元来の東洋的感性のうちに理解されていることも決して牽強附会ではない。東洋を踏まえることで、近代西欧の思想に画一的なイメージに対して、相対的に自由を確保する。そして、異なる仕方 (la otra vía) で、西欧の「問い」に独自に応答していく、さらに、それによって西洋と東洋を合体させるということ。つまり、単なる「受容」ではない、一担吸収してそれを自己淘汰の上固有の方法で表現していくトリアーダ的思考様式なのである。こうしたパス詩学の一展開がここに見られるのである。

それでは、la ruedaや「冷たい炎」の近代西欧的イメージが東洋をくぐることで固定的なものに陥らない、という点は理解できるとして、独自のイメージをもって応答していくとは如何なることなのか。それは、革命直後のメキシコに特徴的な民族主義的、社会主義的文化状況を醸成するに功のあった壁画運動を通じてであった。元文相ホセ・バスコンセロス (1921-24) の主導の下、リベラ、オロスコ、シケイロスなどの代表的壁画家が協力して推進されたもので、パスはこのような民族文化教育の下で育った「第一世代」である。多かれ少なかれ、壁画から民族的メッセージの集中砲火を日常的に浴びて即ち、国民国家気運の醸成期の只中で学んだ、と言える。M.ウラシアはその著書の中でEPFが、「バスコンセロスと主要な壁画家たちが推進する民族文化に関する公式見解」を反映すると指摘している (P. 53)。特に、オロスコ (1882-1959) はパスに大きな影響を与えた。1930年、パスは中心部サン・イルデフオンソの国立高等学校 (ENP) に入学する²²⁾。すでにオロスコの壁画があった。「旧秩序の解体」「ストライキ」「塹壕」など、全てメキシコ革命に題材をとったものだ²³⁾。メキシコ大学、国立宮殿、カバーニャス救貧院 (ゲアダラハラ市) でも1936-39年にかけて製作されている。パスはオロスコの壁画を初めて見たときの印象を次のように語っている。「ENPに入学して初めて観たときも、それから50年経った今日観ても、それらの巨大で極彩色の皮肉は私に衝撃を与えた」(P. 241) と述懐している。パスはメリダに向け1937年に旅立ったが、この年にはゲアダラハラ州政府宮殿には、「革命的三位一体^{トリアーダ}」ほか、「軍人主義と手を組む宗教の亡霊」「イデオロギーの謝肉祭」などが完成している。特にパスを震撼させた作品は、同市カバーニャ救貧院 (現カバーニャス文化センター) 天井の壁画「火の人」(el Hombre de fuego) である。煉獄の業火で焼かれる人間の、悶え苦しむ姿が回転しながら沈んでいく。このように、征服や革命に題材をとったオロスコの壁画は二元性 (AかBか) を基本原理とする歴史観に貫かれている。例えば、征服者コルテスと馬、

それに対する機械仕掛けの馬とロボット騎手、宗教と異端審問vs.20世紀のイデオロギーと戦争・異端者の粛清、機械化する現代社会とイデオロギー的の自己疎外vs.人間の非人間化と機械仕掛けの騎手、などである。オロスコのこの二元性の根にあるのは、征服者コルテスを神話上の神ケツアルコアトルと同一視した古代メキシコ人の宗教的イデオロギー原型、である。古代メキシコ人には、他者を判別するカテゴリーは、自分たちと同じ人間か、神か、このいずれかしかもっていなかったために、自分たちと同じ人間でないスペイン人（白人、鬚、馬など）を神と信じたのである。パスはオロスコの創作の源泉について、「(彼の) 描く象徴や形姿を注意深く検討される日が来れば、彼の複雑なビジョンが彼の魂の内に潜む古代メキシコ人のイメージの再生であることが理解されよう²⁴⁾」と語っている。パスは古代より連綿と続く歴史観に自由でありえた。本稿の主題とする詩篇EPFも「石」と「花」からなる二元論を含むものである。しかしそれは、「石」か、「花」かという対立として捉えるのではなく、「石」と「花」とさらにその彼方 (el más allá) を包含したものである。

オロスコの歴史観との関係で、パスの弁証法を最後に押えておこう。オロスコの二元論をパスは女性についても見る。即ち、彼にとり女性は母、娼婦 (lo abierto) かカリタス会修道女 (lo cerrado)、である。パスは、「何故、オロスコは女性の中に、開かれることで我々に神聖なる糧を持たらず宿命的柘榴を見ないのか。それは我々に歌や笑いそして高揚をもたらしてくれる²⁵⁾」、と異なるビジョンを提示する。このパスの思考法が孤独のトリアードであり、彼をして階級闘争史観を初めとする、全てのイデオロギー並び党派性から超越させている²⁶⁾。これが、「孤独の弁証法」(『孤独の迷宮』最終章) なのであり、1937年に全てを捨ててユカタンに向ったときに体験的に自覚された。そして、1949年の『孤独の迷宮』執筆に於いて経験化されるまで、長い意識(経験)化のプロセスを経るのである。そこに詩人パスを長きに渡って「亡命」同然の状態に追い込む背景があった。EPFのプロセスはまさに詩学上に刻まれた詩人パスの青春の「彷徨」として同一化されるのである。

第11章 帰還そして神罰の終焉（結びに代えて）

文学上の問いに正解などあるはずもないし、終わりのあるはずもない。新たな状況の下で、問い方が変わり、新たな応答があるだけである。最初の問いをひとつの推進力的な手掛かりとしてEPFを読み続けてきて思うことは、現実に沿ってパスの

詩を追跡してきて、ここまで来ると、どうしたことか、パスの詩あるいは文学が逆に現実を再創造しているという事実である。現実よりも強固な詩的現実がリアルに迫って来るのである。この逆転現象こそが万人が時空を超えて共有できる詩的現実としてより本質的な精神（エスプリ）を形造るのである。

1971年、パスは長きにわたる外国生活から帰国する。フリオ・シエレーは「証言²⁷⁾」の中で次のような当時のパスを回想する。「1970年末、パスには未来への明確な展望はなかった。メキシコでは拒絶されていると感じていた。長い亡命（*exilio*）のせいで、彼は奇異な人物と見られていた」J.シエレーは当時、メキシコの主要紙エクセルシオール編集局長である。パスは同氏に招かれて、文芸誌*Plural*の編集長としてメキシコでの再出発を踏み出すのである。1971年10月に第1号が発行され、それからおよそ5年間、58号に達していた。しかし、発行元エクセルシオール紙で内紛が起きたのだ。J.シエレーは辞任することになった。パスもそれに殉じて*Plural*誌を辞職するのである。これが1976年のことである。「我々は、読者の支援やその友情を信頼してエクセルシオールを去ることに決めた。最初から支援者の友情があった。700人を上回る友人たちからの寄付のおかげで我々は最初の数号を出せる²⁸⁾」1976年11月にパスとその友人たちは、文芸誌*Vuelta*（「ブエルタ」）を自力で創刊し始める。1937年にスペインの戦場に於いて経験されたのと同じ瞬間、真の人間の友愛（*Fraternidad*）のときが「降臨」するのである。詩人の新たな生の場がそこに「開闢」する。その文芸誌の名称*Vuelta*（「帰還」）それ自体が物語るように、この瞬間にパスは長い「亡命」から解放される。やっと祖国に受け入れられ、真の「帰国」・「帰還」・「迷宮」からの脱出、を遂げるのである。「1977年の状況は、1937年のそれと非常に違った」（P. 325）とパスは感じる。その背景がここにある。煉獄の業火に焼かれるように山越え谷越え諸国を転々とし続けた40年に終止符を打ったのだ。EPFから*arde*の連呼する第5連が完全削除される時、パスの詩世界が普遍的な文学へと昇華されるのである。このような考えが一つ成り立ちうるのではないかと思うのである。開かれた結論、それが結論である。

註

- 1) Octavio Paz, *Obra Poética (1935-1988)* Seix Barral, 1988 P. 786 “Entre la piedra y la flor se editó varias veces. En 1976, al preparar esta edición, lo releí y percibí sus insuficiencias, ingenuidades y torpezas. Sentí la tentación de deshacerlo; después de mucho pensarlo, más por fidelidad al tema que a mí mismo, decidí rehacer el texto enteramente.”

- 2) 出版直前まで“El henequén(エネケン)”というタイトルで出版を予告されていたが、詩人で友人のエフライン・ウエルタの助言でEPFと改名した。(G. Sheridan, Poeta con paisaje. Ed. Era, 2004. P. 227)
- 3) Hugo J. Verani. La Bibliografía crítica de Octavio Paz (1935–1996), El Colegio Nacional, 1997. P. 13
- 4) Octavio Paz, El ogro filantrópico, Joaquín Mortiz. 1979, P. 326
- 5) Octavio PAZ, Obra Poética (1935–1988), S. Barral社. 1979. P. 326–327, El ogro filantrópico, Joaquín Mortiz, 1979, P. 326. おそらく、この二律背反はずっとパスの意識の中にあった。シエリダンは同詩篇を「野心的で（出来の悪い）」と評しているが、パスが「決して十分には満足しきれなかった」(Como nunca me he sentido totalmente satisfecho.) という時、シエリダンの言う意味での不完全性を言うのでないことは、この点で明らかとなる。
- 6) Has muerto, camarada,/ en el ardiente amanecer del mundo./ Has muerto cuando apenas/ tu mundo, nuestro mundo, amanecía./ Ilevabas en los ojos, en el pecho,/ tras el gesto implacable de la boca,/ un claro sonreír, una alba pura.
(Obra Poética I <1935–1970> T. 11, P. 94)
君は逝った、同志よ／熱き世界の夜明けに／君は逝った／今まさに夜が明けなんと／君の世界、われらが世界／君は口を固く結ぶとも／その眼、その胸一杯に／湛えたる屈託のなき微笑／まぎれなき曙光
(仮訳、筆者)
- 7) Bajo esta luz de llanto congelado/el henequén, inmóvil y rabioso,/con sus índices verdes hace visible lo que nos remueve,/el callado furor que nos devora(T. 13, P. 106)
- 8) El henequén, verde y ensimismado,/brota en pencas anchas y triangulares:/es un surtidor de alfanjes y vegetales./El henequen es ma planta armada(T. 11. P. 87)
- 9) En el alba del callados venenos/amanecemos serpientes/
Amanecemos piedras/raíces obstinadas/Sed descarnada, rabios minerales
La luz en esta horas es acero,/es el desierto rabio del desprecio,/Si yo toco mi cuerpo soy herido/por rencorosas púas(XIII, P. 106)
- 10) Amanecemos piedras/
Nada sino la luz. No hay/nada sino la luz contra la luz
La tierra:/Palma de una mano de piedra
- 11) Octavio PAZ, La magia de la risa (SEP, México. 1962.) 所収。

- 12) 高山智博「メソアメリカ文明の環境に関する遺産」(メキシコ大使館講演2008年12月) 日墨交流会会報Aguila y Sol第24号 4頁参照のこと。
- 13) Octavio Paz, La silueta de Ireneo Paz, T. 14. Miscelanea II. 2000, P. 146
- 14) A las seis de la tarde/alza la tierra un vaho blanquecino/Vuelan pájaros mudos, barro/
Arrasan nubes crueles el cielo alado
- 15) Alza la tierra un vaho/Vuelan pájaros pardos/ El horizonte:/unas cuantas nubes arrasadas
- 16) Dame, llama invisible, espada fría/tu persistente cólera/para acabar con todo/Oh, mundo seco/ oh, mundo desangrado/para acabar con todo
- 17) “Osadía que les ha traído un castigo divino que no vacilo en llamar envidioso:”
- 18) 西俣昭雄, 『スペイン語研究入門編』駿河台出版, 1969 78頁。
- 19) Octavio Paz, Cristianismo y Revolución, Primeras Letras(1931-1943) 所収。〈Ed. Vuelta, 1988, P. 396〉
- 20) 阿波弓夫「オクタビオ・パス, 詩作の瞬間 創作の源泉」駿河台大学論叢第35号, 2008, 163-164頁
- 21) 「仏法を車に喩えて, その仏法の輪を回したということは, ここで仏法を初めてお釈迦さま以外の人に向かって話したということ」(瀬戸内寂聴『寂聴・般若心経』中公文庫 1988, 41頁) 因みに, 釈迦が悟りを開いたのは, 「ネーランシヤラー河のほとりの大きな菩提樹の下で座禅をしていた12月8日の朝, 明星が輝いた時」です。ここからパスの長詩「太陽の石」(1957) とその回転詩型を想起させる。
- 22) Octavio Paz, Obra Poética (1935-1988) S. Barral, 1990 P. 788
- 23) Octavio Paz, Ocultamiento y redescubrimiento de José Clemente Orozco, T. 7 P. 241
- 24) ibid. P. 243 “El día en que se estudien con un poco de atención sus símbolos y figuras, se verá que sus visiones más intensas son resurrecciones de imágenes ancestrales enteradas en su alma.”
- 25) ibid. P. 251 “Ve en la mujer a la madre, a la ramera o a la hermana de caridad: no ve en ella a la granada fatal que, al abrirse, nos da el alimento sagrado que nos hace cantar, reir y delirar.”
- 26) パスの「弁証法」は, 哲学固有の研究方法の一つとしてヘーゲルにより確立された弁証法とは基本的に異なる。定立(正命題), 反定立(反命題)へと相続き否定された後の総合(合命題)として定式化されるヘーゲル弁証法(三井善止著『哲学の立場』玉川大学出版部, 1990, 64-65頁), パス全集第11巻 P. 173-174を参照した)に対して,

両極の相対立するエレメントは否定されることなく、「和合」、「合一」する詩的瞬間として啓示される。この「トリアーダ」は例えば、散文詩「遭遇」(Encuentro)において文学的に展開されている。

- 27) A treinta años de Plural (1971-1976) FCE, México, 2001, P. 1
- 28) Octavio Paz, El ogro filantrópico, Joaquín Mortiz, 1979, P. 321